

《第 459 回 (2019 年 1 月 10 日) 子どもの本の読書会記録》 参加者：8 人 文書参加：1 人

時間：10:00~11:30 場所：オーテピア 4 階集会室

『ギヴァー 記憶を注ぐ者』 『ギャザリング・ブルー 青を蒐める者』 ロイス・ローリー/著 島津やよい/訳 新評論

今月は、1995 年に日本で邦訳が出版された『ザ・ギバー 記憶を伝える者』の新訳版が課題図書。ここから続く<ギヴァー4 部作>を2 か月で読んでいきます。

『ギヴァー』では、高度にシステム化された管理社会に生きる少年ジョナスが主人公。ここでの生活はすべて規則に基づき、住民は快適な生活が約束されているうえ、人生における重要な選択も全て、委員会による<儀式>で行われます。12 歳でジョナスが任命されたのは、秘匿とされているある要職。その職業に与えられた特権により彼は、理想郷とされたこの社会の歪みを知ることになります。

2 作目の『ギャザリング・ブルー』は、木造の掘立小屋や怒号飛び交う商店などが立ち並び、憎しみや妬み、暴力が蔓延する、ある意味人間臭い世界が舞台。主人公の少女キラは、類稀なる糸づかいの手腕を買われ、当局専任の住み込みアーティストとして重要な仕事を与えられます。しかし前作と同じく、隠されているのは不穏な事実。キラ達アーティストに与えられる非情な将来や、当局の体裁を守るために隠蔽された殺害など、暗い事件が浮かび上がります。

2 作の共通点は、弱者は規則により排除され、組織の存続のために特定の人間が苦しみを負わされるという社会の歪みです。2 人の主人公が未来のために選択した行動とは。そして、2 つの世界はどのように繋がっていくのでしょうか。

続いて、読書会に参加したみなさんの感想をご紹介します。

●ジョナスのコミュニティは命を操作している感じがし、ジョナスがそこに気付いていくのが良かった。逃亡するシーンは迫力があり、場面を想像することができた。キラは母に愛されていたが、父の死にはミステリーを感じる。欠陥のある人=不幸ではないという、著者からの温かいメッセージを感じた。

●二十数年前、『ザ・ギバー』を読んだ。遺伝子操作、核家族の時代が始まっていた当時、近い将来こんな風になるのではと恐れを抱きながら読んだ記憶がある。全体がモノトーンの世界で、不安は募るが引き込まれていく。キラの世界は、ギャップが大きすぎて、同じ時代? と感じたほど。「ギヴァー」と同じく、苦しみを伴い、痛みを引き受ける存在が「アーティスト」という役割で存在していた。

●抽象的なものを排除すると、差別が無くなり平和になるというのはある意味正

解。差や情があると、戦ってしまう。職業として「ギヴァー」を残したことは、システムは完璧ではないと思っている人がいたからだろう。そのせいで世界はほころんだが、それも計算されていたのかも。2 作目は、1 作目よりかは健全な世界かな。キラが自分の使命を意識し、大人になっていくのが良かった。

●児童文学の良さが分かった。6 年生以上が対象になるかなと思った。自分自身、色染めが好きなので、『ギャザリング・ブルー』は興味を持って読めた。こういう本を読む子どもは、いじめなどの問題を、上辺だけでなく捉えられると思う。子どもたちに託された問題が含まれていると感じた。

●『ギヴァー』を読み進めるにつれ、色彩がそぎ落とされていく。感情も、最初から無かったんだと驚いた。モヤモヤとした思いを抱えている子どもに響く箇所がありそうと感じた。『ギャザリング・ブルー』は反対に、色彩豊かで泥臭い世界観。戸惑いながら読んだ。

●みんな等しく幸せな世界は、高揚感はないが生きやすそう。将来の夢も迷わなくていい。このコミュニティを作った人は、理想を込めて作ったんだろうなという感じがする。1 作目は、科学的に優秀な人が作った世界、2 作目は、人々の理想より自分の地位を重要視した人が作った世界だと感じた。

●平和を維持するために管理された社会は、人類の緩やかな衰退につながるのではないかと思った。実態が分かってくる所は夢中で読み進めた。2 作目は、1 作目の続きかと思ったら、違う主人公、さらに殺伐とした雰囲気には驚いた。主人公の生き抜く強さがとても眩しく感じられた。ほかのキャラクターも素敵。

●1 作目のコミュニティは、今の生活と変わらない様なのに、違和感があり嫌な感じ。現在の生活の流れの続きでジョナスがいるようで妙に生々しい。2 作目のコミュニティは、もっと本能がむき出しで、感情がある。むき出しの感情でもあるだけマンで、読みやすかった。

次回 2 月 14 日 (木) 10:00~11:30 オーテピア 4 階集会室

□『メッセンジャー 緑の森の使者』『ある子ども』